

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ⑱

わたしのとりみだし方

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

わたしの勤務校では、各学年で1回人権講演会を開催しています。もちろん、人権学習においては、外部講師が話すのではなく、担任が自分のことばで子どもたちに話しかけることが原則とは思っています。しかし一方で、多くの子どもたちにとって、高校での人権学習が、もしかしたら人生最後の人権についての学びの場になるかもしれません。であるならば、年に1度は部落や在日外国人あるいは障害当事者の話を聞かせたいと思っています。

かつては講演経験が豊富な方に講師依頼をしていました。いずれの講師も、厳しい差別に直面しながらも、それと闘い、今を生きておられる姿を熱く語られました。わたしはそうした講師の生きざまを通して、差別の現実を知るとともに、その現実を闘いの中で変えられることを学んでほしいと思っていました。

ところが、ある時ショッキングな言葉に出会いました。それは、ある若い部落出身の方の話聞いたあと、ある教員が発した「あの人はまだまだ苦勞が足りない」というひとことでした。被差別の苦勞がないことは「いいこと」のはずなのに、なぜこういう言葉が教員から出てくるのだろう、自分のやり方は間違っていたのではないかと思いました。そして思いあたったのは、「被差別体験を聞くことのインフレーションが起きているのではないか」ということでした。

講師の方々には、厳しい差別の現実について語られてきました。なぜなら、同和教育は「差別の現実から深く学ぶ」ことを大切にしてきたからです。しかし、厳しい差別についての講演を何度も聞いてきた教員は、いつしか「厳しさ」に慣れてしまい、差別の現実に対して鈍感になってしまったのではないかと考えたのです。また、講師の「波乱万丈な人生」は、子どもたちに単に感動を与えるものになってしまいかねません。それは結局、人権の問題をタニンゴトにしてしまいます。そしてなにより、講師の被差別体験と自分のしんどさを比較して「自分のしんどさは取るに足りない」と思わせてしまうのではないかと思いました。

こう考えた時から講師の選び方を変えました。できるだけ子どもたちが身近に感じられるような人であることを依頼するときの条件にしました。そのためにも、直接面識がある若い人をお願いすることにしました。6月号で紹介した小林さんもそんな中のおひとりです。

今、わたしが講師の方々に話してほしいと思っているのは「大きな被差別経験」ではなく、日常生活の中で出会う「小さな経験」です。それは例えば、自分のことを言おうと思ったときに、ふと口ごもってしまった、言葉を選んでしまったりという経験です。あるいは、日常生活の中にひっそりと存在している、マジョリティであればやり過ごしてしまう「小さなトゲ」と出会う経験です。あたかも「普通」であるかのように見える目の前の講師がそうした経験を語ることで、もしかしたら同じ教室にも同じ思いをしている人がいるかもしれないという想像力を持ってほしいと思います。あるいは、自分にもあるかもしれない「小さなトゲ」と出会った経験に気づいてほしいとも思います。

2年生の人権講演会では^{きむふあよん}金和永さんに来ていただき、在日コリアンの経験を話していただいています。ふあよんさんは決して流暢に話されるわけではありません。どちらかという、常に自分と対話し続けながら話されます。そんなふあよんさんは、高校時代に突然ネットでヘイトスピーチに出会った時の感情を「とりみだし」と表現されます。そして、他者のとりみだしに出会った時、まわりはどうすればいいかと子どもたちに問いかねられます。その上で、ふあよんさんは「とりみだしにつきあう。自分もとりみだす」とされます。ある生徒がこんな感想を書きました。「金さんは、在日韓国人死亡みたいな酷いことを言われたりして、傷ついて、毎日いろいろなことを考えながら生活していたのを、今日の話聞いてわかって、見方考え方が少し変わった。僕の母も韓国の人だから考えさせられるものがあつた」。ふあよんさんの「とりみだし」は生徒に伝播していきます。その伝播が教員にも及ぶ、そんな学校にしていくのが、わたしの課題です。